

---

# 連載になるかもしれない、ネタ。？

海野 真珠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

連載になるかもしれない、ネタ。？

### 【Nコード】

N7539V

### 【作者名】

海野 真珠

### 【あらすじ】

どこかおかしいチートな姉の勇者様召還に、ごく普通の弟が巻き込まれました。「ねえ、おうちちゃん。どうせなら私、勇者じゃなくて魔王がいい」「勇者様?!」「うん、決めた。私、魔王になる。だから、勇者はおうちちゃんがやってね」「そうしたら、ボクが姉さんと戦うことになるよ?」「え、イヤ。おうちちゃんは、私と一緒にやなきゃね、ダメ」「勇者様ー!!」「世間様より斜め上(下?)いくチートな姉と、しっかり者の普通の弟。これは、そんな弟の苦勞話・・・かもしれない。

**(前書き)**

早いもので、第6弾。  
ホントの単発の思いつき。

ボクの姉は超チート。  
容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能。才色兼備を実体化したような人。  
でも、どこかおかしい。

そんな姉の弟であるボクはゴクゴク一般人。  
十人並みの容姿と、中の上程度の頭脳。飛び抜けて良いわけではない運動神経。

そんなボクが、なぜか姉と一緒に異世界に召還されてしまった！！

いつものように、姉を教室まで迎えに行く。  
（迎えに行かないと、いつまでたっても出てこない。ってか、人の輪から抜け出せない。）

先にボクの下駄箱で靴を取り、続いて姉の下駄箱へ。  
（少しでも離れると、いつの間にか居なくなる。ってか、連れ去られる。）

手を繋いで校門までの道を歩く。  
（繋いでないと、まともに歩けない。ってか、話しかけてくる人間に進行を妨害される。）

何が悲しくて姉と仲良く・・・などと思っではいけない。  
姉を放置したら、確実に帰ってこない。  
犯罪とかに巻き込まれるならまだいい。  
この姉は、自ら犯罪を無意識に巻き起こす要素を持っている。  
野放しにはいけない。絶対に。

取り留めの無い会話をしつつ、自宅へ向かう。  
犯罪無意識誘発人の姉のため、学校は徒歩圏内。これ、大切。

よし、あの角を曲がったら自宅！！と気を抜いたのが敗因か。  
角を曲がったら、まばゆい光に包まれた。

暗転。

「この膨大な魔力量・・・あなたが勇者様ですね！！」

白いローブに身を包んだ、声から判断するにまだ若いであろう男が。  
がしゅと姉の肩を掴んでいた。

「ぐほあ?!」

取り敢えず蹴りを一発お見舞いし、姉を保護。  
きよとん、としている何とも愛らしい姉の頭を撫でておいて。

「気安く触れないで頂きたい。アナタは犯罪者になりたいのですか？ そろはそうと、ココはどこでアナタは誰で一体どういった経由でボクたちはここに居るのか納得できるように詳細かつ簡潔にご説明いただきたいのですが」

ボクたちをグルリと囲む、怪しい団体に声をかけた。

もちろん、姉はボクが大切に腕に囲つてますよ、当然です。  
状況が判断できない状態でこの姉を野放しにはできません。

「え、あ、あの、・・・あなたは？」

さっきお見舞いした蹴りがまだ効いているのか、若干前屈みの男が  
声を出す。

え？ どこを蹴ったかって？ 一発で抵抗する気力が無くなる所ですよ。男の身体は便利ですね。

「問い質しているのはボクです。言葉は通じていると判断したのですが、通じていなかったようですね。それとも、理解ができなかったのでしょうか。もう一度言います。ココはどこでアナタは誰で一体どういった経由でボクたちはここに居るのか納得できるように詳細かつ簡潔にご説明いただきたいのですが」

これだけ解り易く丁寧に尋ねているというのに、どうしてわからないのか。

こっちが理解に苦しみますね。

いい加減に何か進展させないと、この姉がそろそろ我慢の限界なの

ですが。

「も、申し訳ございません勇者様。わたしはこの国の大神殿の大神官を務め」

「簡潔にとお願いしたはずですが」

「え、あ・・・」

「ふう。もういいです。アナタとの言語交流は諦めました。言葉は通じますね？ ボクの質問にだけ簡潔に答えて下さい。余計なことはしゃべらなくて結構です。いいですね？」

時間の無駄は勘弁願いたいのです。

今にもこの姉が動き出しそうなのですから。

ボクの言葉にココココ頷く白ローブの男。

初めからこうすれば良かったですね。

「ココ、はどこですか？」

「大神殿の魔法陣の間です！」

そういえば、オクたちの座っている石の床の上には、何やら描いてありますね。

「アナタは誰ですか？」

「大神官です！」

どちらかと言えば、魔導師のように見受けられますが、人を見かけで判断してはいけませんでしょう。

「どうしてボクたちはココに居るのですか？」

「勇者様召還を行ったからです！」

王道展開ですね。突っ込む気力も起きないのですが。

「何のためにですか？」

「魔王を討伐していただくためです！」

王道第二段ですね。しかし、これは突っ込むべきでしょう。

「・・・魔王、ですか？」

「魔王です！」

言い切られましたが。

「討伐・・・要するに、殺すための人材が勇者、という認識で間違いありませんか？」

「そうです！！ 極悪非道のあの魔王を殺していただきたいのです！！！」

力説されました。回避ルートは用意されているんでしょうか？

「その勇者、というのは、ボクたち・・・いえ、この方で間違いは無いのですか？」

「そうです！！ この魔力量・・・間違いありません！！！」

確認したのはボクですが、あんまり見ないで頂けますかね。姉が減ります。

「何かの間違いでしょう。この方はただの女子高生でボクの姉です。勇者などではありません」

「いえ、この方こそ」

「



ただでさえ誘拐などという犯罪なのですから。

これに殺人教唆などというのを付加しないでいただきたいのですが。

「ねえ、おうちちゃん。どうせなら私、勇者じゃなくて魔王がいい」

穩便に話し合いでの解決を図っていたボクの努力を無駄にする声が、腕の中から発せられた。

「勇者様?!」

白ローブの男もビックリだ。

「うん、決めた。私、魔王になる。だから、勇者はおうちちゃんがやってね」

一人で何かを納得し、そのうえ決意し、ニコーと見上げてくる姉は可愛らしい。しかし。

「そうしたら、ボクが姉さんと戦うことになるよ?」

「え、イヤ。おうちちゃんは、私と一緒にじゃなきゃね、ダメ」

「勇者様……!」

コテン、と首をかしげる愛らしすぎる姉と。

大絶叫の白ローブの男。

そして、すっかり忘れていたが、周りを囲む怪しい集団。

犯罪無意識誘発人の姉の被害を最小限に抑えるために、ボクには一体何ができるのか。

世間様より斜め上（下？）いくチートな姉と、しっかり者の普通の弟。

これは、そんな弟の苦勞話・・・かもしれない。

(後書き)

いけそじつ...

連載、いけそじつ...

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7539v/>

---

連載になるかもしれない、ネタ。？

2011年8月20日14時15分発行